阿蘇地域の水害の歴史と一の宮町坂梨の集落の変遷

熊本工業大学土木工学科　正員　○村田　重之
〃　　渋谷　秀昭

１．まえがき

１９９０年（平成２年）７月２日の阿蘇の豪雨災害では、植林の場所や樹種、砂防・地山ダムの強度、河道の断面不足や流路形状等様々な問題が浮かび上がってきたが、中でも土地利用がどのようになっていたのかということは、これからの防災計画にとって非常に大切な問題である。これには当然過去の阿蘇地域での水害の歴史が関係しているはずで、この観点から考察しなければならないであろう。

本研究では、熊本地方気象台がまとめた熊本県災異誌[1),2)]などを参考にし、阿蘇地域、特に阿蘇谷と南郷谷を対象にこれまでの水害の歴史を調べた。そして、坂梨の集落が戦後どのような過程を経て現在の状況に至ったのかを空中写真から検討し考察した。

２．阿蘇地域の水害の歴史

熊本県災異誌には古文書などを基にして西暦６５２年から昭和４０年までの熊本県内の災害に関して記録されている。しかし、明治以前のものは記述が簡単で災害の場所を確定しにくいので、主に明治後半の降雨記録が載せられるようになってからのものについて整理している。

明治３３年（1900）から現在までの９２年間に、阿蘇地方で降雨によってなんらかの被害のあった災害は５６を数える。平均すれば２年に１回の割合で災害が発生していることになる。この中で大規模な災害はやはり昭和２８年の水害である。特に南郷谷での被害が甚大で死者・行方不明７０名を出している。また、昭和２５年のキジア台風では多数の山腹崩壊が根子岳、高岳の北斜面で発生している[3)]。その他中規模のもの１７、小規模のもの３６となっている。

一の宮町での被害の記述に注目してみると、昭和２５年の根子岳、高岳での多数の山腹崩壊とそれに伴う堤防の破壊、橋梁の流失、耕地の埋没、昭和２８年の水害では、根子岳のふもとの７００ｈａの牧野の山潮被害、昭和２９年に坂梨滝室坂で崖崩れ２カ所、昭和３７年に坂梨で２５戸浸水、昭和３８年に家屋半壊４、床上浸水１５、床下浸水１８、道路損壊１８、橋の流失６などの記述が見られる。

このように古恵川が流れる一の宮町坂梨では、これまでに降雨による被害がしばしば発生し、また古恵川の上流では土石流も発生しているようである。しかし、平成２年のような流木による被害の記述は見られない。これは多分山腹などへの植林が戦後の昭和２０年代から大々的に勧められ、その後４０年程度の経過で今回の被害にあったものと思われる。

３．一の宮町の集落の変遷

一の宮町、特に坂梨地区の戦後の集落の変遷を年代を追って空中写真から調べてみる。図－１には、昭和２３年当時の集落配置の様子を示している。古恵川のそばには人家がほとんどが見られない。図－２には、昭和４８年当時の集落の状況を示している。この図は昭和２８年の水害からちょうど２０年が経過した時の状況になる。これを見ると次第に川のそばに人家が集中し始めていることがわかる。さらに、災害の１カ月前の集落の配置の状況は川のすぐそばまで人家が建ち並んできている。また、その状況は整然とした配置になっているので計画的に開発された住宅であることが推測される。住民からのヒアリングによれば、一部はすでに町から払下げが行われて個人の所有になっているが、残りは現在も町の賃貸住宅である。

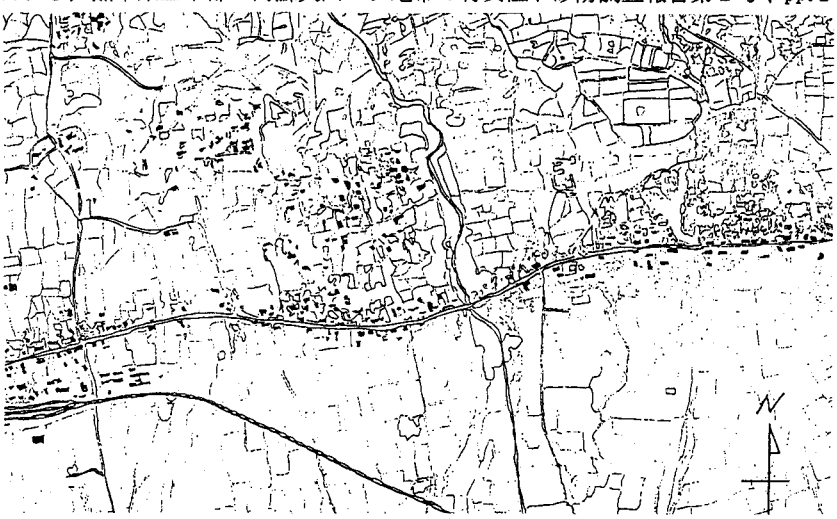
坂梨地区ではこれまでにしばしば水害が発生しているものの、それらは比較的小規模で今回のよう大規模なものではなかったために、川に対する認識に甘さが入り込んだのではないかと推測される。昭和２８年の水害がこの坂梨でどの程度の被害を起こしたのかははっきりしないが、大規模な被害が発生しておればまだ記憶に残っているはずで、川のそばの危険性は認識されて、このような宅地の開発は行われなかったであろう。つまりこれまでの水害が今回のような被害を予想させるほどのものではなかったからであろ

う。また、地山・治水事業の進展、すなわち植林や植生、砂防・地山ダムの整備等である程度の災害は上流で防げるようになってきたことによる安心感が働いたことも考えられる。しかし、今回の災害から自然の破壊力が人間の想像をはるかに越えたものであることが改めて認識され、人間も所詮自然のなかの小さな存在で、自然の猛威の前には謙虚であらねばならないことを教えられた思いがする。

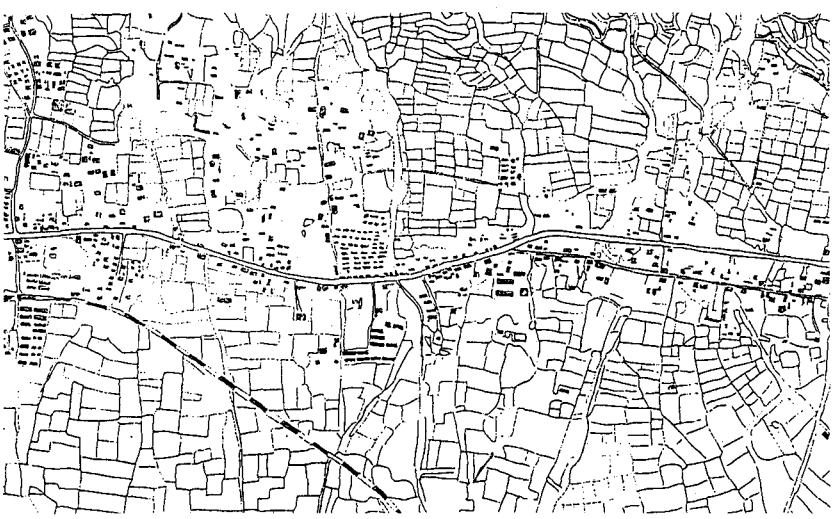
５．あとがき

災害の研究では過去の災害の資料が非常に大切であるが、今回は熊本県災異誌などの気象台の資料が大変に役に立った。また空中写真も過去の状況を調べるのに非常に有益であった。しかし、もっと詳しいデータ、例えば災害の発生した場所やその状況、さらにその場所にもっとも近いところの降雨（時間雨量があるともっとよい）の記録などを探そうと思っても、どこにいったのかわからなくなっている。どんな些細なものであってもどこかにまとめて保管がされているといつか役立つことがありその重要さが感じられた。最後に、本研究で空中写真からのトレースや降雨災害の記録の収集整理等に本学４年生の壬生恵庫君、中村嘉邦君、高浜　勝君に協力してもらった。記して謝意を表する。

参考文献　１）熊本測候所：熊本県災異誌、pp.1-156、1952．２）熊本地方気象台：熊本県災異誌 PART2、pp.1-173、1966．３）熊本県土木部：阿蘇火山ヨナ地帯の特異性、砂防調査報告第１号、pp.1-61、1952．



図－１　一宮町坂梨の集落の配置（昭和２３年）



図－２　一宮町坂梨の集落の配置（昭和４８年）